

レビ記 13 : 45～46

ルカによる福音書 17 : 11～19

「感謝」

<エルサレムへの途中で>

今日のはじめのところの 11 節には、「イエスはエルサレムへ上る途中」とありました。

イエスさまは、エルサレムに向かって旅を続けておられる途中です。この旅については、9 : 51 以下にこう語られていました。

「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。」

天に上げられる時期、つまり、十字架に架けられ、復活し、天に上げられ、すべての人の罪の贖いを成し遂げる、その救いを実現する時が近づいていたのです。それでイエスさまは、決意を固めて、エルサレムに向かっておられました。

それは、決意が必要なことでした。イエスさまはエルサレムで、迫害に遭うのです。苦しみを受けるのです。そこで殺されるのです。それをご存じでありながら、しかし、すべての罪人を神さまの御許に立ち帰らせるために、救いの御業を成し遂げるために、エルサレムへ向かわれているのです。

その道中では、様々な弟子への教えや、ファリサイ派の人々とのやり取りが語られてきましたが、今日また、その旅の続きに戻ってきました。

<重い皮膚病のサマリア人>

さて、今日の所では、イエスさまがそうしてエルサレムへ向かう途中、サマリアとガリラヤの間を通られた、とあります。

「サマリア」というところは、特別な事情がある場所でした。当時のユダヤ人は、サマリアに住む人たちと激しく敵対しており、サマリア人を軽蔑し、汚れたものとし、交わらないようにしていたのです。

サマリア人は、元々はユダヤ人と同じ、神さまに選ばれたイスラエルの民でした。

しかし、イスラエルの国は、北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂します。その後、北イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされた時、都だったサマリアには、多くの異邦人が連れて来られました。そこで、サマリアに残っていた人々と異邦人との混血が進んだのです。

それゆえに、サマリアの人々はもはや純粋なユダヤ人ではなくなったとされ、ユダヤ人はサマリア人を同胞と認めず、蔑視するようになり、犬猿の仲となりました。

ユダヤ人は、エルサレムの神殿にサマリア人が来ることも認めませんでした。それで、サマリア人は別の神殿を建てて、そこで神さまを礼拝していたのです。

それが、今日出て来る「サマリア」という場所の背景です

さて、ユダヤ人が住むガリラヤと、そのようにユダヤ人が近寄ろうともしないサマリアの間を、イエスさまは通って行かれました。するとそこに、ある村がありました。

その村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎えた、とあります。

この「重い皮膚病」は、宗教的に「汚れている」と考えられていた病です。

今日読まれた旧約聖書のレビ記には、この重い皮膚病にかかった人は、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわって、一人で宿営の外に住まねばならない、とありました。彼らは、共同体の中で、同胞たちと共に生活することが許されなかったのです。共同体とは、神さまの民としての共同体、神さまを礼拝する共同体です。

この病気を発症し、祭司がそれを認めたら、その人は「汚れた者」となり、その共同体から出て行かなければなりません。そして、また戻ってくるためには、病気が癒えてから、祭司に「清くなった」と認めてもらわなければならなかったのです。

そんな重い皮膚病の人が十人、集まって共に生活していた。そんな村です。

そして、今日のところを読んで分かるように、十人の内の一人がサマリア人、後の九人はユダヤ人でした。彼らは犬猿の仲でしたが、同じ病気で、共に共同体の外に出された者として、民族的な対立を超えて、身を寄せて一緒に暮らしていたようです。

今日の出来事の主人公は、この重い皮膚病を患っていた、一人のサマリア人です。この人は、二重に苦しみを負っていたと言えるでしょう。サマリア人であるために、ユダヤ人からは神の民と認められない。また病気のために、サマリア人の同胞の中にもいられない。誰の目から見ても、神さまの恵みからは遠く離れている。救いからほど遠いところにいる。そう見られてしまう人物なのです。

<十人の信仰といやし>

さて、イエスさまが来られると、十人は遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った、とあります。

遠く離れているのは、汚れた者が他の人に近づくことは許されなかったからです。

彼らはもしかすると、以前イエスさまが、重い皮膚病の人をいやされた時の噂を、聞いていたのかも知れません。ルカによる福音書の5:13以下には、重い皮膚病の人がイエスさまに清くしていただくことを願うと、イエスさまが手を差し伸べてその人に触れ、いやして下さった、という出来事が語られていました。

そのいやしの御業を行なった方が、自分たちの村を通られる。この方なら、自分たちをいやして下さるかも知れない。彼らはそんな希望を抱き、イエスさまを遠くから呼び止め、憐れみを求めたのです。

さて、イエスさまは、この十人を見て、以前に重い皮膚病をいやされた時とは、違う対応をなさいました。前回は、イエスさまから近寄り、手を差し伸べて触れ、「よろしい、清くなれ」と言っていやして下さいました。

でも今回は、こう言われたのです。「祭司たちのところに行って、体を見せなさい。」

病人たちは、まだ何もしてもらっていないのに、いきなり「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われたのです。

さっき言った通り、確かにこの重い皮膚病は、病気がいえてから、祭司に「清い」と認定してもらわなければなりません。

でもイエスさまが声をかけて下さった時、十人はまだいやしてもらっていないのに、そのまま、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と命じられたのです。

ところが彼らは、このイエスさまの御言葉を信じて、そのまま従いました。その重い皮膚病の体のままで、御言葉の通りに、祭司たちのところへ向かったのです。

まずここに、この十人の信仰の姿があります。彼らは、まだ目に見える現実が変わっていないのに、病気のままなのに、ただイエスさまの御言葉を信じて、イエスさまの御力に頼って、疑いもしないで、すぐに従って行動したのです。

もし、少しでも疑っていたならば、「いえいえ、まずわたしの病に手を触れて、この皮膚をきれいにして下さい。そうしたら、それを見せに祭司のところへ参ります」と言うのではないのでしょうか。

でもこの十人は、病の体のままで、ただイエスさまが下さった御言葉に従った。イエスさまが自分の病をいやすことがお出来になると、心から信頼していたのです。

この態度は、並々ならぬものであると言って良いでしょう。彼らはきっと、わたしたちよりもずっと素直で、わたしたちよりもずっと、神さまに信頼することが出来る人々なのです。

そして事実、彼らは信じた通りに、そこへ行く途中で清くされた、とあるのです。

<帰って来たサマリア人>

しかし、ここから彼らの行動は、大きく二つに分かれました。

15、16 節には、十人の中の一人だけが、祭司のところへ行く途中で自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た、とあります。そして、イエスさまの足元にひれ伏して、感謝したのです。彼は、サマリア人でした。

他の九人も、祭司のところへ向かう途中で、自分がいやされたことを知ったはずですが、でも、イエスさまのところに戻っては来ませんでした。

…それはそうだ、とも思うのです。だって彼らは、「祭司のところへ行きなさい」と言われたのだから、言われた通りに向かっただけなのです。

きっと彼らは、途中から走り出していたのではないのでしょうか。共同体の外で、汚れた者として、恵みから落ちてしまった者として、同胞と一緒に礼拝をすることも出来ず、家族か

らも離れ、虚しく、寂しく、生活をしていた。でも今、確かに自分の体にいやしの御業が起こり、その苦しみが終わろうとしているのです。家族の許に戻れる。仲間の許に戻れる。社会復帰し、共同体の中に帰ることが出来る。嬉しくて、嬉しくて、仕方なかったのではないのでしょうか。一刻も早く、祭司から「清い者」であるとの認定を受けたいし、また、その後で清めの儀式をすることも必要でしたから、それを一刻も早く始めたかったことでしょう。

そしてその思いは、一人のサマリア人も同じだったはずですが、でも、彼だけは引き返して来た。大声で神さまを賛美しながら、イエスさまのところに戻ってきた。なぜなのか。

それは、イエスさまにひれ伏して、感謝したかったからです。

ひれ伏す、とは礼拝をすることです。そして、感謝するとは、自分がいただいた大きな恵みに対して、ありがとうございますと、喜びの思いを表明し、伝えることです。

いただいた恵みに対して、恵みを下さったお方に、応答すること。ひれ伏し、感謝すること。彼にとっては、それが他の何にもまして、最優先事項だったのです。

他の九人は、まず祭司に「清い」と認められることに心が向かっていました。実際、そうしなければ何も始まりません。そして、いやされた後の清めの儀式のこと。長らく会っていない家族や仲間のこと。これからの生活のこと。そのようなことに、心のすべてが向いていたと思うのです。

でも、サマリア人は、まず大声で神さまを賛美せずにはおれませんでした。すべての恵みは神さまから来ることを知っていた。そして、何よりもまず自分のなすべきことは、自分に対して神の恵みの御業を行なって下さったイエスさまに、感謝を述べることだと思ったのです。

それは、義務だとか、常識だからとかではなくて、賛美と喜びに溢れて、自らの思いで、心からそのようにしたかったのです。サマリア人の心は、そうやって、ただひたすらイエスさまに向かい、イエスさまを求めていた。だから、踵を返して戻ってきたのです。

<救い>

これを見て、イエスさまは言われました。

「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」

イエスさまは、戻って来たサマリア人を「この外国人」と言われました。実はこの「外国人」という言葉は、エルサレムの神殿で、異邦人の立ち入りを禁止する札に書かれている言い回しだそうです。外国人はこれ以上神さまに近付いてはならない。神の民ではない者、選ばれていない者なのだから、神さまを礼拝する中心の場所、神さまと交わる恵みの場所に、立ち入ってはならない。そんな線引きの言葉である「外国人」です。

でも今ここでは、その逆転が起こっています。ここには、神さまの救いのご計画を成し遂げて下さる神の御子イエスさまがおられ、恵みの御業を行なって下さいました。

しかし、これまで自由に神殿に出入りし、神さまに近付いて礼拝することを許されていたユダヤ人たちは、ここで、その恵みを受け取って出て行ったあと、それきりになってしまいました。

一方で、これまで神さまの恵みに自由に近づくことが出来ないとされていたサマリア人は、今、神の御子イエスさまの足元にひれ伏し、喜びに溢れて感謝を述べ、神さまを賛美しているのです。喜びと感謝をもって、誰よりも神さまに近づき、イエスさまとの親しい交わりに与っているのです。

イエスさまは、この人に言われました。

「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」。

イエスさまは、ここに「救い」がある、と言われます。イエスさまにこそ心が向かい、その人生の歩みの中心、心の真ん中にイエスさまがおられるということ。恵みを受け取って、礼拝をささげて、喜びと感謝の応答をして、神さまと人との間に、双方向のやりとりが生まれ、親しい交わりが与えられていること。これが、「救い」だと言われたのです。

後の九人は「いやし」を受け取っただけでした。確かに彼らは、イエスさまの御言葉だけを信じ、目には見えない状況の中でも従順に従いました。それはそれで、大したものでした。そして、抱えていた苦しみや問題は解決しました。でも、問題が解決することや、願っていたことが実現すること、癒しと慰めが与えられること、それ自体が、「救い」ではない、ということなのです。

それらの恵みを与えて下さった神さまを、礼拝すること。神さまとの交わりに与ること。呼びかけに応えること。恵みを受けたなら、大きな声で賛美をささげること。イエスさまの許に帰ってきて、ひれ伏し、感謝すること。この、神さまとの良い関係を与えられること、神さまとの交わりに生きることにこそ、救いがあるのです。

イエスさまが「あなたの信仰が、あなたを救った」と認められたのは、このサマリア人が、何よりもまずイエスさまとの交わりを最も大切なものとしたことです。

神さまの恵みを受け止め、溢れる喜びと感謝をささげに、イエスさまの許に戻ってきた。イエスさまはこれを、「あなたの信仰」と呼んで下さったのです。

この救いに与ったのが、重い皮膚病のサマリア人だったのは、救いのために、人が何か条件を持っている必要はないし、何か救われる要因のようなものは、人間の側には一切ない、ということが明らかにされるためでしょう。

彼は、ただ自分に向けて語られた御言葉を信じて従った。一方的に与えられる恵みを受け取った。そして、感謝と喜びに溢れて、イエスさまのところに戻って来て、ひれ伏した。イエスさまに向かうことが、自分の最も大きな喜びとなり、最も大切なこととなった。ここに、救いがあるのです。

わたしたちもまた、自分の救いのために、自分で何かをすることは出来ませんし、何も持っていません。

だからこそ、救い主として遣わされた神の御子イエスさまが、エルサレムへ向かわれたのです。十字架と復活の御業を成し遂げられたのです。わたしたちの罪の問題を、イエスさまが解決して下さいました。死の問題も克服して、永遠の命と復活の約束を与えて下さいました。

この救い主イエスさまと共にあることが、救いなのです。生活の中心、人生の中心、心の中心に、十字架と復活のイエスさまがいて下さることが、わたしたちの救いなのです。

そして、救われた者は、この恵みを与えて下さった方との親しい交わりに生きていくのです。礼拝をささげ、感謝と賛美をささげ、恵みにお応えしていくのです。

<礼拝中心の生活>

そのように生かされていくのなら、これからもし、また病にかかることがあっても、苦しみ悩みを負うことがあっても、問題が発生しても、この方が共にいて下さるならば大丈夫なのだ、平安でいて良いのだ、知ることが出来るのです。

イエスさまと共にあるならば、わたしたちはこの世にあって、この目で直接のいやしや、問題の解決を見ることが出来なくても、神さまの大いなる恵みの中で、終わりの日に完成する、壮大な救いのご計画の中で、御手に守られて歩んでいるのだと信じて、歩んでいくことが出来るのです。

そして、そうしてイエスさまと共にいて下さる恵みこそ、神さまに賛美をささげることであり、感謝をもって、喜んで、イエスさまにひれ伏すべきことだと知るのであります。

わたしたちは、いつもこの方の許で立ち上がり、出発し、そしてこの方の許に帰ってくる事が出来ます。生活の中心に、人生の中心に、心の中心に、帰るところがある。イエスさまがおられるのです。

ある時は、助けを求めて、癒しを求めて、すがるようにして帰ってくる。ある時は、感謝と喜びに溢れて、賛美をしながら帰ってくる。

それは、今のわたしたちにとっては、主の日ごとの礼拝とってよいでしょう。神さまの御前に立ち、御言葉を聞き、慰めと平安をいただき、感謝と賛美をささげる礼拝です。

そして、わたしたちはいつもイエスさまから恵みをいただいて、「立ち上がって、行きなさい」との御言葉をいただいて、イエスさまの眼差しの中で、恵みの中で、立ち上がらされ、また送り出されていく。そして、また賛美をしながら帰ってくる。

この神さまとの交わりに生きることこそが、わたしたちの救いなのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

御子イエスさまによって、わたしたちは罪を赦され、永遠の命に生かされ、まことに大きな恵みをいただきました。この恵みの中で生かされているわたしたちが、自分のことや、生活のことや、周りのことではなく、まず恵みを下さったイエスさまに心に向け、感謝をささげ、心から神さまを賛美し、礼拝することを、一番に求める者となることができますように。

イエスさまの許でこそ、「立ち上がって、行きなさい」との御声を聞くことができます。イエスさまとの交わりに生かされているところにこそ、まことの癒しが、慰めが、励ましが、希望があります。どのような中であっても、イエスさまの恵みによって立ち上がり、イエスさまの恵みの中を進んで行く者として下さい。イエスさまに送り出され、イエスさまを賛美しつつ戻ってくる幸いな歩みを、わたしたちにも与えて下さい。

救い主イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン